
探偵と助手は街を往く

咲染 アイト

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

探偵と助手は街を往く

【Nコード】

N3007U

【作者名】

咲染 アイト

【あらすじ】

トマト大好きやる気なし探偵、ジョウト、まともな常識人で、ツッコミ役のアルスが織り成す、超無気力探偵推理もの。

今日も奴らは、あっちに行きこっちに行きながらも、最後は事件を解決・・・してくれると思います。

プロローグ 喪失クルーズ（前書き）

読者への警告

設定が無駄にファンタジー系ですがこれは、別のファンタジー小説と同じ世界を共有しているからです。

それでもいい勇者は読んでくださいの

登場人物

ジョウ 男 25才

この本の主人公で、探偵。面倒くさがりやで、常にだらけているが、推理力はある。大のトマト好きで、いつも持ち歩いている。

アルス 男 16才

ジョウの助手。まともな常識人で、ツツコミ役。なぜ彼がジョウについて言ってるのかは、謎。

プロローグ 喪失クルーズ

耳に悲鳴が飛び込んできた。

——耳に悲鳴が飛び込んできた。

自分の下で、人が真っ逆さまに落ちていく。

——自分の下で、人が真っ逆さまに落ちていく。

それを待ち構えるのは、真っ青な——

——それを待ち構えるのは、真っ青な——

やっと、自分を思い出す。

——やっと、自分を思い出す。

そして自分の置かれている状況を理解する。

——そして自分の置かれている状況を理解する。

私は、人を——

——俺は、人を——

ブローグ 喪失クルーズ（後書き）

追記

大幅修正。

第一話 探偵の助手がくじで当てたツアーチケットは大抵殺人現場への切符（前

サブタイトルが長いのはとある漫画の影響だなんて口が裂けても言えない。

それから、バレンダンは次の小説の舞台です。

推理ものとファンタジーが同じ世界・・・なんと無謀な。

第一話 探偵の助手がくじで当てたツアーチケットは大抵殺人現場への切符

「あー…仕事ねえ…」

ジョウがそういったとき、ちょうど事務所のドアがバン、と開く。

「ジョウさん！」

助手のアルスである。

「あーアルスカ…おかえり…」

「なんでがっかりされなければいけないんですか…」

— — — — —
— — — — —
— — — — —
— — — — —

ここは大陸トールライトの北方に位置する国、スライログト。

南方の国、バレンダンでは魔物や魔族といった種族が多いようだが、この国ではそのたぐいの生物は一切見かけない。

ジョウとアルスは、その国の東側に、「探偵事務所ジョウ」を開き、暮らしていた。

— — — — —
— — — — —
— — — — —
— — — — —

「いや、客かと思ったんだよ…。」

そういうジョウは、椅子に座り、机に足をかけている。

「あなたの態度を見たら客も逃げますよ…。」

そう言ってからアルスは本題を思い出し、懷から紙を取り出す。

「そうそう、さっき、その商店でトマトを買ったとき、くじをしてみたたら、エンブ海クルーズのツアーチケットを当てたんです！ちようど二人までなので、行きましようよ！」

確かに、彼がもっている紙には『エンブ海クルーズ 二名様』と書いてある。

しかし、これに対するジョウの答えは否定的だった。

「ツアー…ねえ…。どうせあの作者のことだから、事件起こるよ、どうせ。で、俺が推理することになる。だるいわ…。」

「あんた探偵のくせになにやってんですか？」

そう言って怠け者の助手はチケットを投げつけようとしたがさすがに思いとどまり、こう続けた。

「行きましようよ、こんな機会滅多にありませんし。どうせ他国の観光したことなんてないんでしょ。」

「うっ…。」

心なしかアルスは、ジョウからグサツ、という音が聞こえた気がした。

当のジョウは、こう言う。

「いや…じゃあ、アルスはどっか行ったことあんのか？」

「バレンダンと…」

「（微笑）」

「なんで笑ってるんですか…。あと、ジルセインにも行きましたし…。」

「（笑）」

「…メルラスにも行きましたよ。」

「（爆笑）」

「何がおかしいんですか…。」

「俺の負け。」

「認めるんだ。…つか、そのネタ何かのパクリじゃないですか？。」
真っ白になった自分の師匠を眺めながら、アルスはチケットに書かれている文を読む。

「『朝から夜までの食事付き』って書いてありますけど。」

「マジで!？」

「あ、復活した。」

「それはつまり、食費が浮くってことだよな…。よし!アルス!何ぼさっとしてんだ!早く準備しろ!」

「切り替え早っ!」

アルスの言葉には構わず、家計の厳しい探偵は、荷物を作り始める。
「あ、ジョウさん、カバンにトマト詰めたら駄…」

ベチャ！

―手遅れである。

第一話 探偵の助手がくじで当てたツアーチケットは大抵殺人現場への切符（後

感想、ご意見などお願い致します。

第二話 ひったくりされそうな鞆には爆弾を入れとけ（前書き）

ちよつとジヨウの外見に触れます。

ジヨウ

黒髪で、少し長め。

身長は普通よりやや高い。

一応精悍な顔をしているのだが、常に無気力なので台無しである。

追記

設定をひとつ取り消しました。

第二話 ひったくりされそうな鞆には爆弾を入れとけ

トマト騒動（アルス命名）から一週間、探偵と助手は港に来ていた。
「いっぱい人いますねー。」

「ああ・・・これ全部ツアー客？」

「いや、この近くにショッピングモールがあるので、そっちの客も多いみたいですよ。」

「ふうん・・・。」

そのような会話をしながら、二人は集合場所に近づく。

しかし、次の瞬間、悲鳴が聞こえる。

「きゃあああああああ！」

「何だ!？」

ジョウが真っ先に反応する。

直後、アルスが駆け出す。

「ちょっと見てきます！」

アルスが悲鳴の聞こえたところへやってくると、そこには主婦と思われる女性がいた。

事情を聞いてみると、ひったくりにあった、と言う。

顔はよく見えなかったそうだが、鞆の色や形を聞き、アルスはそのカバンを持っているものを探し、捕まえた。

―捕まえたのだが。

困ったことに、そのカバンを持っている人間は・・・三人いた。

ひとりとは中年の男性で、左足に怪我をしていた。
もつとも、走るくらいはできそうだったが。

もう一人は若い男性。

ポケットからコインを落としてすぐに拾っている姿が見受けられた。

金を持っているならひったくりなんてしないだろう。
アルスは、そう考えた。

最後の一人は、若い女性。

身なりからして主婦ではないだろう。

女性と言っても、力は強そうなイメージを持ち、ひったくりくらいならできそうであった。

三人ともツアー客だと言っており（と言っても、例の鞆はわりと大きいものであり、食材を買い込む必要のある主婦など以外は普通、旅行に行くために使うくらいにしか使えなさそうであった。）集合時間までは時間があるので、事情を話しても時間を割かれてもイライラするような人間はいなかった。

が、この状況で犯人を特定するのは、至難の技である。
そこへ現れた人間が、一人。
すっかり忘れていた、自分の師である。

第二話 ひったくりされそうな鞆には爆弾を入れとけ（後書き）

御意見、御感想などお待ちしております。

第三話 腕時計型麻醉銃は、もってないよ。(前書き)

今回、ちよつと長いです。

アルス

黒髪、目はやや茶色。

髪はジョウより少し長めで、身長は短め。

服装は、普通におしゃれしたり動きやすい格好だったり、いろいろ。

第三話 腕時計型麻醉銃は、もってないよ。

ジョウが現場にやってくると、アルスのそばに、男性が二人、女性が二人いた。

ジョウはすぐにその四人を、

中年男性は水泳選手、

若い男性は土木作業のアルバイト、

若い女性はキャビンアテンダント、

アルスが主婦だと思った女性はその通り主婦、

だと見て取り、アルスに事情を聞く。

ちなみにこの他人の職業を当てるといふのは長年練磨した技、というわけではない。

彼が探偵を始めた頃になんとなくやってみたらピタリと当たり、それ以来一度も外れたことがないために、彼は重宝している。

と言っても適当に当てているのではなく、言動、仕草、服装、その他もろもろの要素から総合的に判断している。

ともかく、アルスから事情を聞いたジョウは、少し考える。

もちろん、一番楽なのは中身を確認することだが、ジョウもアルスも警察ではないので、そんなことはできない。

とすれば・・・

ジョウは、再び考える。

そして、リュックからトマトを取り出し、食べる。

ちなみにこれは、どうしてもトマトを持っていききたいジョウのために、アルスがたっばに入れてからリュックに入れたものであり、潰

れたりはしていない。

(なぜ今トマトを・・・?)

というアルス含む五人の視線には全く気付かず、まだ考えている。そして、若い男性を指さし、こういった。

「ひったくりしたの、お前ですよね？」

敬語なんだかタメ口なんだかわからない口調で、あっさりと犯人特定。

指された男性は、こういう。

「え・・・いや、なんでそうなるんですか・・・」

「あなた、ポケットから小銭を落としたそうですね？」

「そうですが・・・」

「何を買ったんですか？」

「なぜ買った・・・と決めつけているんですか？」

「普通、これからツアーに行く人間が、ポケットに小銭を入れたりしないでしょう。ポケットに入ってるのは、釣銭ですね？」

「・・・・・・・・ええ、そうですよ。野菜を買いました。」

「あなたは、ツアー客ではありませんよね？」

「なんでそうなるんですか。」

「ツアーに野菜を持っていく人間がいますか？」

お前が言うな、というアルスの視線を見事にかわし、ジョウはこう続けた。

「野菜を買うのに、ずいぶん大荷物ですね？」

「・・・・・・・・」

「中を改めさせていただいてもよろしいですか？」

「・・・・・・・・」

男性は素直にカバンを下ろし・・・全力ダッシュ！

「あっ、おい、待て！・・・アルス。」

助手の名前しか呼ばなかったジョウだが、アルスは察し、こう反した。

「えー？僕ですかあ？ジョウさんが行ってくださいよ。」

「急に子供っぽくなりやがった、こいつ。」

「事実、子供ですから。」

「だがアルスが行くべき。」

そう言って、トマトをアルスに手渡す。

おそらく、投げてぶつけてこい、という意味だろう。

「はぁ・・・仕方ないですね・・・」

第三話 腕時計型麻酔銃は、もってないよ。(後書き)

御意見、御感想お待ちしております。

第四話 野菜は基本、食べるか投げるかの二択（前書き）

そういや今まで「ジョウ」「アルス」で通してきましたが、彼らの本名は

ジョウ・クライン

アルス・ロス

です。

第四話 野菜は基本、食べるか投げるかの二択

トマトを持ったアルスは、ひったくり犯の逃げた方向を見る。

既に男は、もうほとんど見えない位置まで逃げている。

だがアルスは特に慌てず、軽く跳躍した。

だが、この「軽く」というのはあくまでアルスの主観からの形容であり、実際には常人では到底到達し得ないような高さ——約3メートル——まで飛んでいる。

周りの人間が、ジョウを除いて驚愕の眼差しでアルスを見ているのは、仕方のない話である。

空中で、再びアルスは、男の場所を確認する。

そして、トマトを構え……

全☆力☆投☆球！

「いや……投げたのは球じゃないから……投トマトだろ。」

「ジョウさん、くだらないことを言って物語の進行を止めるのはやめてください。」

いつの間にか降りてきているアルスが、そう返す。

一方、アルスの投げたトマトは、きれいに男の方へ飛び……

ベチャ！

トマトの潰れる音とともに、男は倒れた。

（あれ、この音、最近聞いたような……？）

という既視感^{デジャヴ}を覚えたアルスに、ジョウは言葉を投げる。

「アルス、あくまで捕獲だからね、捕獲。抹殺じゃないからね。」

「死んでませんよ。……見りゃわかるでしょ。」

「俺はね。一般人から見りゃどう見ても死んでるだろ。」

「トマトが飛び散るのも、それが血に見えて死んでるように見えるのも、不可抗力です。だいたい、トマトを投げて人を殺せる人間がいるなら、紹介して欲しいですね。」

「トマトを投げて人を気絶させられる奴なら、目の前にいるがな。つか、普通トマトを渡されたら、走って、追いついて、投げるだろ。なんであんな目立つマネしやがったアァァ!」

二人は、死たi・・・じゃなくてひったくり犯の方へと歩きながらそんな話をしていた。

「追いつくのは簡単ですけどね、そんなことしたら一般人はもっと驚きますよ。」

もし、二人の会話を聞いていたものがいれば、「走って追いつくこと」は不可能だと、熱弁したに違いない。それほどの距離だったのだ。

——今の会話から分かるように——分かるかどうかは微妙だが——分からないかもしれないが・・・
アルスは、類い稀な運動神経を持っている。

それに加え、視力、聴力ともに常人よりも優れており、武術も心得ている。

刀や短剣を筆頭に、拳銃から、果てはハンマーまでも使用できる。
正直、怖い。

アルスが知る限り、彼に勝てるものは・・・

——ジョウくらいである。

ジョウもまた、相当強い。

・・・が、今必要なのは、運動神経ではなく、視力や聴力でもなく、あらゆる武器を使うスキルでもない。

警察への、言い訳である。

本来なら、言い訳する必要など全くない。

が、今まさに、ツアーの集合時間が迫ってきているのである。

警察に、「今もうツアー行くから、処理はよろしく!」と言って、すんなり行かせてもらえはるはずがない。

事情聴取やらなんやらで、ツアーに行くなど、無理である。
なら、どうするのか?

ジヨウはひとつため息をつく・・・

「逃げるぞ、アルス!」

「ええっ!」

「逃げたって、周りの人がオレらがヒーローだってことを、証明してくれるさ!」

「僕がトマトを投げて人を気絶させたなんて、信用してくれますかね・・・?」

「無理!」

「おいイイ!」

そんなこんなで二人は、集合場所へと向かった・・・

— — — — —
— — — — —
— — — — —

ひとりの刑事が、港にやって来た。

「通報を受けて来たものです・・・何があったんですか?」

尋ねられた主婦は、こう返す。

「え・・・っと・・・トマトを投げて気絶しました。」

「・・・は?」

刑事は、彼の一生の中で、聞いたこともないようなセリフを発した主婦から、目を離し、周囲を見回す。

その視界の中に、走りゆく二人の男を見つける。

刑事は、片方の顔を見ると、こういった。

「あり? ジヨウじゃねーか。」

第四話 野菜は基本、食べるか投げるかの二択（後書き）

遅れました・・・すみません。

さて、次回は新キャラ大幅登場になると思います。

第五話 探偵って、必ず刑事の知り合いがいるよね（前書き）

久々の更新です。

遅くなってすみません。

キャラ紹介←

ルーズ・ロドン

護民署（本文内に説明あり）の刑事。

騙されやすいが、嘘をつかない。

つまり、扱いやすい。

ジョウの知り合いのようだが・・・？

第五話 探偵って、必ず刑事の知り合いがいるよね

おーい……。

誰かの呼ぶ声が気がする。

と言っても、こんな人ごみの中で、それが自分たちへ向けられたものだとは断定できない。

だが、なぜだろうか。

その声が、近づいてきている気がする。

そして、アルスがその声が自分たちへの声であることを確認する前に――

ジョウが吹っ飛んだ。

一瞬自分の目を疑ったアルスだが、その事実是不変ならない。

そして、ジョウとは別の方向を見ると……。

「ちょっ……、初登場シーンで後ろ回し蹴りはないんじゃないの!?」

その言葉は、まさしくジョウを蹴った本人へ向けられたものである。そしてその言葉は、吹っ飛んだ直後体をひねってうまく地面に着地したジョウ本人が発したものである。

どうやらジョウは知っている人間らしいが、アルスはこの男が誰かを知らない。

「えっと、どなたですか？」

「ん？ ああ、俺はな、護民署の刑事やってる、ルーズ・ロドンってもんだ。あんたは？」

この男の言葉遣いから考えて、護民署――市民を守る組織――の人間とは思えなかった。

それを察したのか、ジョウが口をはさむ。

「そいつの言ってることは本当だ。」

「ほ、本当ですか？」

アルスは、まだ男を信じきったわけではないが、名乗っておく。

「アルス・ロスです。この人の助手やってます。」

「助手！？お前、そんな金あったの！？」

それは、アルスに向けられた言葉ではない。

「ああ・・・まあ、いろいろあってな。」

ジョウはそして、こう続けた。

「で、あんたは何しにきたんだ？ひったくり事件が理由じゃやねえんだろう？」

「おーよ。実はこの港から出港のツアークルーズ船の警備を任せられて、もう出発するじゃねーか！」

「え？」

聞いた二人も釣られて振り向くと、集合場所で人数確認を終えたところだった。

直後、三人が駆け出す。

走りながら、ルーズがジョウに言う。

「おい、トマトで人気絶させたのおめーだろ？警察なめてんのか。」

警察、という言葉に馴染みのないアルスは、少考してそれが異世界ラエルの護民署に似た組織であることを思い出す。

一瞬、異世界ラエルにも行ってみたいな、と思ったが、口には出さずこう言う。

「そうですよ、犯人はこの人です。」

「おいアルスなめてんのか。お前だろ。」

それに対して、呆れ顔でルーズが返す。

「そんなことできるわけねーだろ、おめーじゃあるまいし。」

「出来るんだよ、それが。」

いよいよ集団が船に入り始めている。

三人はさらにスピードを上げた。

「実践してみせましょうか？」

「いや、いい。」

そう返しつつ、集合場所からこちらを確認できる距離にまでくると、ルーズが叫ぶ。

「ちょおおおっと待てやアアア！」

もはや不良である。

それに驚いて全員が三人を見る。

はつきり言って、声が聞こえた時よりも驚いただろう。

というか、身の毛もよだつ思いだったはずだ。

三人の男が、自分に向かって猛スピードで走って来て、驚かないほうが不思議である。

「うおおおおおおおっ！」

間違いなく突っ込んでくる――と思った人間が多いことは言うまでもないが、彼らの予想は外れた。

三人とも、人にぶつかる手前で前に体を倒し、両手を突き、それをため、腕の力で集団を飛び超えたからだ。

ある意味壮観である。

「ルーズさん、あんたなかなかやりますね。」

「おめーもな。」

そう言って妙なところで意気投合している二人は置いて、ジョウは案内人と思われる人に近づいた。

「あのお、ツアーに参加します、ジョウ・クラインっつーもんです」
周りの人全員の顔がひきつっているのは、気のせいではないだろう。
これからのたびに、不安を覚える客が多いのは、仕方がない。

そうは思っても皆、口には出さず船へと入ってゆく。

「おい、行くぞ。」

呼ばれて二人も船を見る。

三人は、船の中へと入っていった。

探偵、助手、刑事、そして悪意。

それらが揃って、事件が起きない訳がない。

第五話 探偵って、必ず刑事の知り合いがいるよね（後書き）

御意見、御感想お待ちしております。

・・・というか最近、短くなりがちだなあ

第六話 注：作者はツアークルーズなど行ったことはありません。（前書き）

最近、更新ペースが早くなってきました。

でも5作を一日一回ずつ更新していてもひとつの作品は五日に一回なんだよなあ・・・。

第六話 注：作者はツアークルーズなど行ったことはありません。

探偵と助手が船に入った時の、最初の感想。

「・・・寒いですね。」

「そうだな、空調が効きすぎてる。」

夏とはいえ、まだ朝だ。

日中の暑い時ならば気持ちよく感じたであろう冷房も、この時間では肌寒い。

朝とはいえ、まだ夏だ。

そう考えて半袖半ズボンといういでたちで来たジョウとアルスには、この温度に慣れるまでに時間が掛かりそうだ。

「お前ら、そんな格好でいるからだ。」

そういうルーズは、一応よれよれの護民署指定の制服を適当に着ている。

当然、長袖だ。

「ルーズ、警備つつてたが、どんな配置になってる？」

「俺と、巡査が二人、あと監察の奴が一人来てる。」

そう言って見渡すが、あいにく入口付近に彼らはいない。

「四人！・・・それ、なくても変わらないんじゃないか。」

「ちげーねえ。形だけの警備だ。護民署も、こんなもん人員割いてる暇はないんだよ。」

頭を掻きながら、そんなことをぬけぬけと言う。

「そーかい。昨今の警察不信の意味が分かった気がするな。」

返しつつ、ジョウも船内を見渡す。

眩しいばかりのオレンジ色の照明に照らされて、ガラスの装飾がキラキラと光る。

まるで高級なホテルである。

夜見れば様になるんだろうが、今はまだその輝きはない。

「豪華なもんだな。こんな機会でなかったら、一生見ることも叶わ

ないくらい、な。」

「事務所は常に火の車ですからね・・・。」

今まで会話に参加していなかったアルスが、ため息をつきながら入る。

「まあ、おめーらもせいぜい頑張るこったな。じゃ、俺は仕事があるから、行くぜ。」

立ち去っていくルーズを見ながら、アルスが疑問を口にする。

「ジョウさん、あの人本当に護民署の刑事なんですか・・・？」

「残念ながら、そのとおりだ。あの年で、しかもあの口調で刑事なわけだから、一応優秀っちゃー優秀なんだがな。」

納得のいかない頭を無理やり納得させ、アルスが歩き出す。

「どこに行くんだ？」

「船に入る前に貰ったこの紙によると、僕ら部屋が与えられるみたいですよ。」

「どんだけ豪華なんだ・・・ってかどんだけ広いんだ・・・。」

船の規模に呆れつつもジョウはアルスについていく。

すたすたすたすた。

絨毯が敷いてある廊下を歩くこと5分。

やっと、お目当ての部屋にたどり着いた。

部屋番号は「104」。

髪と一緒に貰ったカードをかざすと、部屋の鍵が開く。

部屋の中に入る。

今回は日帰りのツアーだが、何泊かするツアーにもこの船は使用するらしく、ベッドが置いてある。

他にも、シャワーやトイレなど、まさにホテルさながらの部屋である。

二人は、とりあえず荷物を置き、一息つく。

「あー、なんかいろいろあってもう疲れましたね・・・。」

「そうだな、もう『喪失クルーズ』編終わりでいいと思うよ、俺は。」

「ああ、そうだな。朝食の時間は？」

紙を見た、アルスの返事。

「決まってるじゃないそうですよ。一応9時まで、とはなっていますが。」

「そんなら、あと30分くらいしたら行くか。」

時計を見て言うジョウの提案に、アルスも同調する。

「そうですね、じゃあ行きましょうか。」

目的が決まり、二人は部屋を出た。

— — — — —
— — — — —
— — — — —

「ここが、飯を食う場所か。」

歩いて最初にやってきた場所は、食事をする、テーブルのある部屋である。

場所の確認だけして、二人は進む。

— — — — —
— — — — —
— — — — —

「ここは・・・？」

「休憩室、と書いてありますよ。」

部屋の中には、ソファーなどがあり、新聞も置いてある。

ふとその中に、船に乗り込む前に見た人物を見る。

「あの方は・・・。」

アルスがそちらを見ると、向こうも気づいたようだ。

二人に歩み寄ってくる。

「先程は、どうも。」

「あ、いえ・・・。」

ひったくり騒ぎの時に容疑者になった、水泳選手である。

第六話 注：作者はツアークルーズなど行ったことはありません。（後書き）

御意見、御感想お待ちしております。

第七話 ギャンブラーは度胸がある（前書き）

小説を書く気力が出ねえ…

第七話 ギャンブラーは度胸がある

「あ、どうも…。」

アルスがそんな返事をする。

それに対し、相手はまた

「ありがとうございます！」

などと繰り返している。

とりあえず、自分ではなくこの人に言ってください、と言いかけ、だがそれも相手の服装を見て忘れた。

先ほどとは、格好が違う。

「あれ、服…？」

つい、疑問をそのまま口にする。

赤い無地のTシャツに、七分丈のジーパン。

よく見ると、右の肩に猫のワッペンが付いていた。

アルスの視線がそちらへ向いているのに気づき、相手は簡潔にこう述べた。

「空調が強いので、着替えました。これ、彼女につけてもらったんですよ。」

そうですか、などと気のない返事をするアルスに、会話を傍観していたジョウが、尋ねる。

「アルス、こいつは…？」

「えっ、忘れたんですか！？ジョウさんって、記憶力だけは良かったんじゃないでしたっけ。」

即答。

「だけ」という言葉はあえて無視し、探偵は前の言葉を撤回する。

「冗談に決まってるだろ。さっきの万引き騒ぎの時の、水泳選手だろ。」

その言葉を途中まで聞き、あんたが言うとは冗談にないです、などと言おうとした助手だが、あとの言葉に絶句する。

「え、水泳選手？」

やっと訪ね返した言葉は、当の本人によってかき消された。

「私のことを、知っているのですか？」

「いいや？ 初対面だし、名前も知らねえ。」

しゃあしゃあとそんなことを言うジョウを前に、相手はしばし沈黙する。

「：カラー・サイズです。」

「アルス・ロスです。」

「ジョウ・クラインだ。」

互いに名乗り合う。

その後、やはり沈黙が場を支配する。

だがその視線から疑問を汲み取ったジョウは、即座にこう続けた。

「なんであんたの職業がわかったのかって？ 説明すつと元も子のねーから、しねーぞ。」

冷たい目で、断りを入れる。

そうして、短い問答が終わる。

「では。」

そう言って、会話を打ち切った彼らは、ただ目的もなく歩いていく。

しばらくして。

相も変わらず気力にかけた顔で当たりを見回すジョウは、ひとつの大部屋を見つける。

「『CASINO』：賭場か。」

扉にかかったプレートを読む。

「どうします？」

「当然、行くだろ！」

即答。

ふう、と呆れるように首を振り、アルスが答える。

「相変わらず賭け事が好きですね…。」

それ以上は言わず、扉を開ける。
途端。

ファンファララーン！
ジャラジャラジャラ：
ガシャ、ガララララ：

「さ…騒がしいですね。」

アルスの第一声は、それだった。

ジヨウは、涼しい顔でそれを流す。

「そうか？こんなもんだろ。」

そして彼は、目についた椅子に向かう。

「ど、どこに行くんですか？」

探偵は振り返り、返答する。

「ポーカーでもしようかと思ってね。」

それだけ言うと、またそちらへ進む。

「別行動ってことですかー？」

声が聞き取りにくくなる程度の距離。

しかし人一倍耳がいい彼には、しっかりと聞こえたようだ。

「好きにしろー。」

やはり人一倍耳のいい助手も、それを聞き取り、思案する。

だがそれも一瞬で、すぐに結論を出す。

——ついていくのは、面倒だ！

という訳で、近くのスロットマシンへと向かう。

そして、自分の財布を開け、そこで少し考える。

やり方はよくわからないが、まあなんとかなるだろう。

：なんて、適当な思考をするようになったのは、やはりジヨウの影
響が大きいのだろうか。

しばらくして。

「で、出ない…。」

疲れた顔でそういうアルスは、一旦休憩し、うなだれる。あれ、うなだれるってこれ休憩になってるのでしょうか、などと呟く。

そんな彼に、さきほど別れた探偵が近づく。

「よう、アルス、出てるか…?」

彼はジョウを一瞥すると、うなだれたまま答えた。

「そう、見えますか…?」

それに対し、間髪いれずに答える。

「いや、全然。」

そのセリフにイラっときたのか、ジョウの方を見ずに喋る。

「なんですか、これ…一生でないんじゃないですか。」

「いやいや、そういうものでもないぜ?」

その言葉に反応し、そちらを見るアルス。

まずはじめに視界に入っただのが…コインがたくさん入った袋。

「…………。」

黙り込むアルスに、ジョウは声をかける。

「何か、言ったらどうだ…?」

「…どや顔をやめてください、どや顔を!」

うろうう…と、また落ち込むアルス。

「まあまあ、博打なんてそんなもんだ。」

肩をとんと叩きながら、ジョウが励ます。

「何か…船酔いしてきました。ちょっと外に出てきます。」

「ああ…いつてらっしゃい。」

ふらふらと、ドアへ向かうアルス。

がんっ、と一度扉にぶつかってから、また歩き、部屋から出る。

そして部屋を出て。

船縁^{ふなべり}へ向かうとしたアルスは、まず一番最初に見知らぬ男を見た。

「あ、どうも…。」

適当に言って、再び歩き出す。
が。

「あ、ちょっと待ってください。」

呼び止められた。

「えっと、僕ですか？」

「はい。」

このときアルスが会った、この男。

彼こそが、事件と最も近い場所にいる者だった。

第七話 ギャンブラーは度胸がある（後書き）

とりあえずこのシリーズは早く完結させたい。

…まだ結構あるけど

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3007u/>

探偵と助手は街を往く

2011年11月16日20時44分発行